



常勝のワンチームを作る8つのステップ vol.26

「狂」という言葉に対し、皆さんはどのようなイメージを抱くでしょうか。最近はあまり良いイメージを持たれない言葉かもしれませんが、幕末に多くの志士を育て上げた長州の吉田松陰は、「狂愚誠おそに愛すべし、才良誠おそに虞るべし」という言葉を残しています。この場合の「狂」は熱狂における熱量を示す言葉だと私は解釈していますが、熱量が求められた幕末の志士は、「狂」という言葉をとても大切にしていました。たとえば坂本龍馬は「自我狂」という文字を好んで書きました。幕末の動乱を生き抜き、明治の元勳となった山県有朋は、「山県狂介」と名乗っていたこともあるほどです。

現代は豊かで恵まれた時代です。しかし、恵まれすぎて生活が乾き、生が乾き、命が乾いていないかと危惧しています。おしぼりは、濡れているとズツ

シリ重いのに、乾いてカラカラになると軽くなる…このように生活が乾けば、生きていること自体も軽くなり、命すら軽くなってしまいます。

多くの自殺者が生まれたり、「人を殺してみたかった」などというまったくもって理解できない動機から殺人事件が起きたりするのには、こうしたことが背景にあるのではないのでしょうか。皆が変に頭でっかちになってしまうことが恐ろしい、すなわち「才良誠おそに虞るべし」という状態になっていないでしょうか。しかし、愚かになれないと、「浸りきる」ことはできません。狂ったようにのめり込まないと、鮮やかなものをつかむこともできないのです。

ラグビーは熱量がないとできないスポーツです。試合開始の笛が鳴れば、相手に100パーセントの力でぶち当たるわけですから、もちろん「狂」が必要。

感性にはあるが 理性にはないエネルギー

文 林 敏之
text by Toshiyuki Hayashi



私が楢円球と出会ったのは中学2年生のときですが、こんなラグビーの面白さに熱狂しました。

学校のクラブ活動で選択したことがラグビー人生の始まりでしたが、ボールを持って一直線に走ること、相手に全力でぶつかるタックル、これらが楽しくて楽しくて仕方ありませんでした。「体が弾むというのはこういうことなのか」と感じた体験でした。このように「狂う」と思うほど何かのにめり込む経験は、人間を大きく成長させます。その原動力は、何かを達成したいという欲求です。ただ、今は理性

が優先されすぎる時代。狂いそうになるぐらいに何かを成し遂げたいという欲求があっても、理性でコントロールすることが求められます。もちろん欲求の種類によっては、上手にコントロールしなければならないものもあります。しかし、欲求にはエネルギーが詰まっています。理性ですべての欲求を否定したら、エネルギーそのものが失われてしまいます。

そう、エネルギーを持っているのは感性であり、理性にはエネルギーがありません。

Profile

1960年徳島生まれ。13歳よりラグビーを始める。日本代表を13年間務め、神戸製鋼では7連覇を達成。同志社、神戸製鋼、日本代表、第1回RWCではキャプテンを務めた。オックスフォードブルー、歴代ベスト15に入る。引退後はラグビーで体験した湧き上がる感動を伝えようと、教育の道を志し、感性教育をテーマに活動している。2006年にNPO法人ヒーローズ設立、理事長就任。



『常勝のワンチームを作る
8つのステップ』
林敏之
発行：白秋社
定価：1870円（税込）